

「フィルム・アンデパンダン 1964-ぼく自身のためのCM」映画の書店販売 -発掘された映画、半世紀を越えて蘇る日本初のインディーズ(自主)映画祭-

概要：今年2020年の東京でのオリンピックが決定しましたが、今から49年前の1964年のオリンピックイヤーに、日本初のインディペンデントの映画祭が行われました。映画作家のみならず、美術、ダンス、演劇の分野から参加したその映画祭は、その頃主流となりつつあったTVCMを映画の形式として用いるものでした。当時8ミリフィルムで作品を作り始めていた飯村隆彦・大林宣彦ら映画作家だけでなく、赤瀬川原平、風倉匠、刀根康尚、平田穂生ら美術やダンス、演劇分野から、来日していたドナルド・リッチー、メリー・エバンスなど今や巨匠と呼べる錚々たるメンバーが集結し、紀伊国屋ホールで映画祭を行いました。それら公募作品から選ばれた作品を50年ぶりにDVD化。まさに日本のアバンギャルド映画の原点が半世紀ぶりに発掘された映画として蘇りました。Youtube、ニコニコ動画などの個人による動画投稿が取りざたされている今日ですが、既に50年前にこんな映像作品が！という驚異の映像世界の最先端に勝負するイメージ群は、日本の映像史に大きな1ページを書き加えることとなるでしょう。

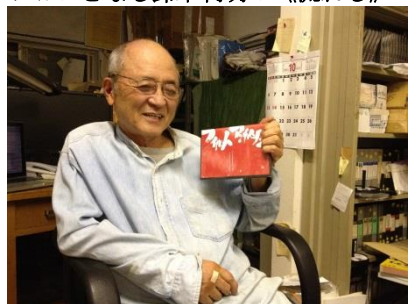
販売元：現代企画室、発売日：2013年10月、全国書店・美術館などで販売予定



ストップウォッチを2分間映し続け映画＝時間であると思わせる刀根 康尚の作品



フィルムに直接絵を描いてアニメーションとなる鈴木利明の《流れる》



今年 76 歳の飯村氏をはじめ、参加メンバーの何人かは現役アーティストとして今も精力的な活動をしている

詳細：

●「アンデパンダン」という表題は前年まで読売新聞が主催していた「読売アンデパンダン」展が諸所に理由により中止されたことから、アーティストたちが自らアンデパンダン展を映画でやってみようと、という試みとして命名されました。

●1964年12月に紀伊国屋ホールを借り切って、日本で初めてと言えるインディーズシネマ(自主映画)の映画祭が行われました。両日とも多くの観客がその新しい潮流を一目見ようと集まりました。

●大資本・スタジオ撮影・有名俳優をふんだんに要する商業映画に対してのアンチテーゼとして100フィートのフィルム約2分の映画作品を作りました。中にはフィルムカメラに初めて触れる作家もいましたが、飯村らが使い方を教え、時に自らカメラを担当し、作品を完成させました。

●参加作品には、通常の映画とは全く違う手法、フィルムに直接針で穴を開ける、様々なCM映画をつなぎ合わせるもの、女性の皮膚を極限までにアップにする、カメラを360度水平回転を繰り返すもの、など当時の前衛的芸術の熱気あふれ、商業映画には絶対出来ない手法や実験が展開されました。

●これらの運動は雑誌・新聞などで地下映画＝アンダーグラウンド・シネマとして取り上げられ、後に「アングラ・ブーム」の火付け役となりました。

●中心メンバーとなった飯村隆彦は現在もN.Y., ロンドン、パリを行き来して、実験的な映像アートの活動を行っており、その他大林宣彦は新作の劇場映画を、また赤瀬川原平は東京と名古屋でハイレッドセンター回顧展が行われるなど、参加メンバーは現在もエネルギーに表現活動を行っております。彼らの活動の原点が、このフィルム・アンデパンダンであったと言えます。

取材・掲載のお問い合わせ先

NPO 特定非営利活動法人ビデオアートセンター東京 代表：瀧健太郎(たきけんたろう) TEL 080-4355-1721
E-mail taki.kentarou@ebony.plala.or.jp 作品詳細は http://www.ref-lab.com/products/film_independent/index.html